

板倉鼎 その芸術と生涯

A5判・並製本・総80頁・119点カラー掲載
没後75年記念

1929年(昭和4)9月29日、洋画家・板倉鼎(かなえ)は留学先のパリで28歳の短い生涯を閉じました。大正15年夏にパリに到着して以来、不慣れな異郷で妻子を養い、さらに画業の習得に専心するという多難な生活にもようやく慣れて、一条の光、独自の画風確立の手応えを掴みはじめた矢先の逝去でした。

千葉県、松戸町の医家に生を享け、千葉中学で堀江正章の薫陶を受け、東京美術学校西洋画科に進んで、岡田三郎助、田辺至の指導を受けるや、卒業の翌年渡欧という、まさに画家の登龍門をまっすぐに駆けのぼり、前途洋々たる画業を歩みはじめた途端の病魔との出会でした。ともにパリにあった美術学校以来の画友・岡鹿之助の尽力もあって、パリの画室に遺された作品はすべて郷里にもたらされ、家族、ことに令妹・板倉弘子の手で、渡欧前の作品と合わせて、今日まで保存されてきました。



板倉鼎の没後75年に、遺された油彩画、膨大な水彩画(下絵)、素描などの中から、油彩88点、水彩画(下絵)20点、素描3点、版画3点、そして、パリでともに描いた妻・須美子の油彩画5点、合わせて119点を選抜し、妹・弘子の「兄板倉鼎の思い出」、詳細年譜を添えて刊行しました。



板倉 弘子・編著

定価 本体 2,000 円+税

ISBN 4-938740-53-2 C0071

美術の図書三好企画

<http://miyoshikikaku.com>

〒270-0034 松戸市新松戸 1-162 A-102
電話 047-347-3211 FAX 047-347-3222

お近くの書店にご注文下さい。
通信販売致します(送料)

キ リ ト リ

流通センター 取扱品 出版 地方	番線印	美術の図書 三好企画 Tel.047-347-3211 Fax.047-347-3222	注文数
		板倉 弘子 編著 板倉鼎 その芸術と生涯 定価 本体 2,000 円+税 ISBN 4-938740-53-2 C0071	冊

板倉 鼎 (かなえ) 略歴

1901(明治34)年——当歳

3月26日、千葉県東葛飾郡松戸町一丁目(現・千葉県松戸市本町3-15)の内科医・板倉丁太郎(ていたろう)、勝の長男として生まれる。

板倉家は江戸期以降々々漢方医で、下総葛飾郡旭村、北葛飾郡金杉村と居を移して医業を営んでいたが、鼎の祖父・板倉佳内(かない)に男子が無く、同村の出身で西洋医学を修めた医師・臼倉丁太郎を娘・勝の婿養子に迎えた。この縁組を機に、水戸街道の宿駅で、東葛飾郡の行政・経済・文化の中心地であった松戸町に移った。

1913(大正2)年——12歳

松戸尋常高等小学校(現・松戸市立中部小学校)を卒業する。

千葉県立千葉中学校(現・県立千葉高等学校)に入学する。

当時、同校の図画教師で、寄宿舎・敬義寮の舎監であった堀江正章(1858~1932)から、夜間油絵の指導を受けることになる。

1919(大正8)年——18歳

4月、東京美術学校西洋画科(現・東京芸術大学美術学部)に入学する。岡田三郎助、田辺至の指導を受ける。

フランス留学を希望する鼎は、岡田三郎助が主宰する本郷絵画研究所でさらに学び、フランス語習得のためにアテネフランセにも通う。

1924(大正13)年——23歳

3月、東京美術学校西洋画科を卒業する。岡鹿之助、野口謙蔵らが同窓生。

東京日日新聞社展に出品する。第2回春陽会展に《編物をする少女》が入選する。この《編物をする少女》は妹・弘子をモデルに描いた作品で、美術学校在学中盛んに妹を描く。

1926(大正15)年——25歳

2月2日、須美子夫人を伴って新婚旅行を兼ねた渡欧の旅に出る。

1928(昭和3)年——27歳

3月、イタリア各地を訪れる。

第9回帝展に《赤衣の女》を出品、入選する。

1929(昭和4)年——28歳

4月、サロン・ナショナルに「静物(窓辺の金魚鉢)」が入選する。

4月8日からルネッサンス画廊で「巴里・日本人美術家協会展」が開催され、鼎は須美子とともに出品する。

5月17日、第10回帝展にを出品するべく、《画家の像》と《赤衣の女》を日本に発送する。《画家の像》が入選する。

6月18日から月末までベルギー、ブリュッセルのコダック画廊で「日本人会展覧会」が開催され、鼎も出品する。

8月末頃から歯の具合が悪く歯科医に通うが、外国人であるために高額の治療費を要し、困惑の態を実家に書き送っている。

9月26日、歯槽膿漏による敗血症を発症し急遽入院する。

9月29日、急逝する。10月1日、友人・岡鹿之助らの尽力で葬儀をすませ、荼毘に伏す。

(抜粋)